

## 摘要

本稿では、豊富な泉質を誇り、全国的に有名な温泉観光地である登別温泉においてその形成過程や現状と課題、外国人観光客の実態について明らかにした。形成過程については、滝本金蔵や栗林五朔といった戦前における登別温泉の大規模な開発や交通整備をおこなうことで登別温泉を発展させた。現状について、宿泊施設の規模は大規模な施設か小規模な施設しかなく、近年の新しい流れとして、部屋数を減らす分、部屋の質を高める宿泊施設が現れている事が明らかになった。商店街については宿泊施設の中にある売店の影響もあり、賑わっていない店舗が多い。外国人に関して、2010年度の宿泊者の延べ数は1996年の誘致開始時と比べ約40倍に増加した。外国人の主な出身は東アジアの国や地域であり、次いで東南アジアの国となっている。東南アジアの人々は北海道の雪を見に来ることが多い。

課題については、宿泊施設の従業員や商店街の後継者不足がある。特に前者については小規模宿泊施設に見られ、高度な接客技術の習得と登別市を含んだ隣接都市の人口の少なさにより働き手がなかなか現れない。駐車場の問題は登別温泉が抱える課題の象徴ともいえる。すなわち、登別温泉は国立公園のなかにあり、観光開発には限界があることである。駐車場の整備、増設は容易にできない。

外国人の実態については、大規模宿泊施設に宿泊する傾向があることが明らかになった。クレームやトラブルに関しては、部屋の使い方や、風呂の使い方について多い。風呂の使い方については観光ガイドやテレビの影響がある。宿泊施設は掲示等対応をしている。

北海道にも格安航空の就航が始まっている。2年後には函館まで新幹線が開通する予定であり、23年後には札幌まで開通する予定である。観光というものがさらに多様化するなか、国内・国外の観光客をどう誘致していくのかに注目していきたい。